○婦人百話

樂天子

四、美人の種類

美とは或る一區域の人類がその習慣上目に見て「あゝいゝ」「あゝ奇麗」と感ずる所のものにして、國に依り人種によりて一定せず、彼の支那の蕩子冶郎をして垂延を禁ぜざらしむる纏足は、到底我が意料の及ぶ所にあらずして、その醜や眞に嘔吐を催さしむべく、西人の尊重する蜂腰も、肥大を重んじて殊更衣服の間に物を入るゝパリ土人の目には、實に一顧の値もなかるべきなり。

亞非利加のエジプトなる、コプト人は目の大なるを美人として、目緣を黑く彩どり、ホッテントット人は乳房の長く垂れ下るを美人とし、北亞米利加のメキシコ邊に住するクローインデヤンと稱する土人は、人工にて頭を斜に後に長からしめて、美人とし、南洋のニューギニー土人は、鼻の障子に棒を貫き、皮膚に傷をつけ、赤白の土を塗抹し齒を摺り減らして美人とし、ニューゼーランドの土人は、黑き直毛を態々縮らせ、面部一体に分身して美人を作り、南亞非利加のネグロは皮膚の黑きを貴び、黑きが上に尙ほ黑き油を塗り、眞黑にして光澤あるを美人となす、されば世界に於ける美人の特徵は種々樣々のものにして、色白く、眼涼しく、身の細りたるは日本人の美人にして、世界の美人にあらざることを知るべきなり。

五、アイヌ婦人の文身

アイヌ人の文身は、男子には射術が上手になるといふ一種の迷信より、肩と手の大指の傍とに纏かばかり行はれ、婦人に於て最も盛に行はる、即ち額に一字形に施すもの、眉間にぱつちり施すもの口の周圍に覆面を掛けたる如くに施すもの、腕より手の甲にかけて美しき模樣を施すもの等にして既に明治十四年に政府より禁ぜられし所なるも、

彼等は北海道の山間に住するを以て今尚ほ默許の姿にて盛に行はれ居るなり。

文身の技師は一村一人位の割合にてこの業に從事す、その手術はマキリといふ小刀にて局所を縱横に傷つけ、多量の出血を樺の皮を焚きて「タモ」と稱する木を煮しめたる汁にて洗ひ、後に墨を塗り込むなり、母親は娘が年頃に至りし時は、親心の慈悲を以てこの恐ろしき裝飾を行ひ、娘も亦その時期の至るを待ち、好んでこれに從ひこそすれ、決して嫌惡するが如きことなしといふ、而してその手術を行ふときには、餘りの苦痛に堪へずして氣絶するもの往々ありと、風習とは實に恐ろしきものならずや。

アイヌの文身の起りに就て彼等に面白き傳說を存す、そは我々の祖先にもあらず、アイヌの祖先にもあらざる一種の別人種が、今の北海道へ退きし時、アイヌも亦此處に移り、自己の開明を誇つて先人種の未開を侮どり虐待せしかば、彼等はアイヌに逢ふことを好まず、常にかくれて物品の貿易をなしたり。

或時今の十勝に於て、アイヌの靑年等寄り集ひ、彼等の性觀破すく、屋外に物品を出して、その交換に來るを待ち、無理に小屋の中に引き入れて、その身体を檢査せり。然るに丁度若き婦人にして、口の周圍と腕とに美しき文身を發見せり依て其の故を正したるに、曰く男女鬚髯なければその區別をするためなりと、此の時アイヌは文身を美しき裝飾と感じ、後之れに眞似たるものなりといふ。

此の傳說中の人種は、所謂石器時代の人民にしてコロポックルと稱する所のものなり、今日諸方より發見さるゝ所の石斧、石劍、石鏃、石棒など、何れも皆彼等の使用せし遺物なりとす、コロポックルとはコロポックル、即ちアイヌの語にて、蕗の下の人と稱する意味にして、アイヌの一地方にて、石器時代住民に命ぜし名稱なるが、內地人の語調に便ならしめんがため、坪井理學博士の命ぜし所なりとす、即ち北亞米利加の一部に住するエスキモー土人は、能くこの人種に類似せるものなりといふ。